

2020年4月

今月の新着図書から

W. G. ゼーバルト，鈴木仁子訳『アウステルリッツ』

新装版（白水社，2020年）

高等科図書主任

林 知宏

ゼーバルトという作家の名を初めて知ったのは、数年前のことだ。近所の江戸川区立葛西図書館で開催された「世界文学を読み解く」という講演の場であった。講師を務めたのは、著名な翻訳家柴田元幸氏である。柴田氏は、あえて専門のアメリカ文学の領域外からボルヘス、オルハン・パムク、そしてこのゼーバルトの名を挙げた。ドイツ生まれの作家で、イギリスの大学で教鞭をとりながら創作を重ね、ノーベル文学賞の候補になりながら、不慮の自動車事故で亡くなった人物という紹介に思わず興味をそそられた。中でも『アウステルリッツ』、『土星の環』は傑作との発言が印象に残った。

二作品とも白水社から「ゼーバルト・コレクション」の一つとして刊行されていたが、長らく品切れとなっており、古書のマーケットで法外な価格で取引されていた。私は一度、白水社の編集部直接電話をかけて、再刊を強く要望したが（当然のことながら）実現しないままになっていた。本年になって『アウステルリッツ』が、装い新たに刊行されたことは朗報だった（『土星の環』他2作品も近刊予定）。

この小説は、物語進行の通例と異なる趣がある。建築史家のアウステルリッツという人物が主人公である。彼は幼少の頃の記憶を失くし、出自も本当の名も生い立ちも知らない。そして本来の言語や両親のことを明らかにしたいと望んでいる。その彼のとめどもない語りを聞き手が記す体裁になっている。段落替えもない文章が延々と続き、ときおり「～とアウステルリッツは語った」という言葉が挿入され、独特のリズムを作っている。アントワープ、ウェールズ、ロンドン、プラハ、パリといったヨーロッパ各地の街において、アウステルリッツが自身のアイデンティティを回復していく旅行記のようでもある。次第に彼の過去が明確になるが、ハッピーエンドの小説ではない。プラハで彼の幼少時代の記憶がよみがえり、ナチズムの蛮行によって家族が離散してしまったこと、母はユダヤ人収容所へ、そして父はパリへの亡命が判明する。さらにその跡を追い求めていく展開に、読み手も次第に引き込まれていく。あちこちにイメージを補助するための写真が挿入されており、抑えられたトーンのこの小説全体の色調に変化を添えている。

この2020年3月、世界中の様相が一変してしまった。自宅から外へ出る機会が減った毎日、このゼーバルトの作品は読書への集中の機会をもたらしてくれた。濃密で充実した時間を過ごした体験は、私にとって忘れ難いものとして記憶に留まり続けるだろう。